

弁殿尼御前御書

文永一〇年九月一九日 五二歳

貞任^{さだとう}は十二年にやぶれぬ。将門^{まさかど}は八年にかたぶきぬ。第六天の魔王、十軍のいくさを^起をこして、法華經の行者と生死海の海中にして、同居穢土^{どうごえど}をとられじ、うばはんとあらそう。日蓮其の身に^当あひあたりて、大兵^起ををこして二十余年なり。日蓮一度もしりぞく心なし。しかりといえども弟子等・壇那等の中に臆病のもの、大体或は^墮をち、或は退轉^退の心あり。尼ごぜんの一文不通の小心に、いま^退でしりぞかせ給はぬ事申すばかりなし。其上、自身の^仕つかうべきところに、下人を一人つけられて候事、定めて釈迦・多宝・十方分身の諸仏も御知見あるか。恐々謹言。

九月十九日

日 蓮 花 押

弁殿尼御前に申させ給へ

しげければとゞむ。弁殿に申す。大師講^行ををこなうべし。

大師とてまいらせて候。三郎左衛門尉殿に候文^{ふみ}のなかに、涅槃經の後分^{ごぶん}二卷、文句五の本末、授決集^{じゅけつしゅう}の抄の上巻等、御隨身あるべし。